

平成24年2月21日

聴取結果書

東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証委員会事務局

局員 仁保智紀

平成24年2月8日、東京電力福島原子力発電所における事故調査・検証のため、関係者から聴取した結果は、下記のとおりである。

記

第1 被聴取者、聴取日時、聴取場所、聴取者等

1 被聴取者

民主党衆議院議員 海江田 万里（元経済産業大臣）

2 聴取日時

平成24年2月8日午前10時00分から同日午後0時00分まで

3 聴取場所

衆議院第一議員会館 財務金融委員長室

4 聴取者

高野 利雄 委員

小川 新二 事務局長

高嶋 智光 参事官

加藤 経将 参事官補佐

飯崎 準 参事官補佐

三田 浩平 主査

仁保 智紀 主査

5 ICレコーダーによる録音の有無等

あり

なし

第2 聴取内容

事故対応全般について

第3 特記事項

特になし

【取扱い厳重注意】

○質問者 それでは、基本的には時系列に沿って確認していきますけれども、ちょっと時間の関係もありますので、かなり主要なところに絞りつつお尋ねしたいと思います。

まず、海江田先生が3月11日の、こちら、お手元の時系列の方に、17時42分「15条事態発生につき菅総理に報告」という記載がございます。これにつきましては、ここにはないのですけれども、17時35分ごろに海江田先生の方で平岡保安院当時の次長から、原災法15条2項の原子力緊急事態宣言の発出について了解をされたという記録がございます。

一番初めに、これは東電の方から15条通報があったのが16時45分なのですけれども、海江田先生の方で確認を、この15条事態が発生したという報告を受けてから了解をされるまでというのは、時間的にみて、説明を受けて、更にその補充で調べて、それで、ああ、これは確かに該当するなというふうにある程度の時間を要したのか、あるいは、もう即答で、これはもうすぐに宣言まで行かなければならんなという判断をされたのか、そのあたりの経緯についてはどのようなものだったのでしょうか。

○海江田元大臣 地震が発災しまして、経済産業省に戻りまして、経済産業省で会議をやったわけですから、その会議の中でぎりぎり間に合ったのか、それとも、その会議が終わってから、すぐ11階の大臣室に行きまして、そこで受けたのかということにははっきり、ちょっと記憶が定かでないのですけれども、会議の時間帯ははっきりしているので、16時45分から第1回経済産業省緊急災害対策本部開催ということなのですが、勿論これに出席して、17時12分までとなっているんですね。そうすると、これが終わってからだろうと思うのですけれども、大臣室にとにかく行って、そこで平岡次長から話を受けたと記憶しているのです。

それで、私は一応、それまでは、制御棒が入って停止をしたということですから、その点については安心しまして、それで、テレビなんかを見ると、起きていたのは京葉コンビナートの火災の問題、それから、3月ですから、間もなく灯ともしごろになりますから、恐らく大規模な停電が起きるのではないだろうかというようなことで、そっちの対応が、これは大変だと思っていたのですね。

そこへもってきて、今度は、どうも電源が、冷却ができないぞという話を受けたので、それら一通りの確認はしますが、とにかく平岡次長が、あのとき院長は官邸に行っていましたから、保安院の責任者である平岡次長が言っていたわけですから、私は即座にという、私の気持ちの中では何か時間をかけたということにはなかったように思います。

それで、すぐそこから、これは総理に報告をしなければいかんということですから、いつも大臣車というのは、運転手、警護員、そして私と参事官と4人ですけれども、総理に説明しますから、とにかく事情がわかる人間が行かなければいかんと。ですから、経済産業省の保安院の中の、これはあえて個名は言いませんけれども、若い人で、それまで福島検査員の責任者だった人間を連れて、それを後ろの真ん中の席、彼が真ん中だったな。それで、後ろ3人で窮屈な思いをしましたがけれども、とにかくおっ取り刀で官邸に駆けつけたわけですね。

【取扱い厳重注意】

だから、その意味では、何かそこで平岡次長あるいは保安院の人とあれこれ問答をしたという記憶は余りないです。ほとんど、まあそういうことなのかと。

○質問者 そうすると、事業者からの報告について、これは本当にその15条の原子力緊急事態に該当するのかどうかということについては、さほど時間を要したという記憶はないということでございますね。

○海江田元大臣 ないですね。

○質問者 その後、車で官邸の方に行かれて、こちらの時系列の中では、17時42分に菅総理に15条事態の発生について報告と。これは、公示をするという宣言についてになると思うのですが、その公示案についての決裁も併せていただくという御趣旨ですか。

○海江田元大臣 そうですね、あれ、何か文書を持っていったよな。たしか紙を持ってきました。

○質問者 このときの菅総理の反応ですが、経済産業省サイドとしては、これはもう15条事態として即座に対応しようというお考えで行かれたということだと思っておりますが、そのときの菅総理の反応というのはどのようなものだったのですか。

○海江田元大臣 これは、いろいろな人がいろいろなところで発言していますから、とにかく「大変なことなのだ、わかっているのか」ということを何度も言ったということは確かですね。「大変なことになる、大変なことになる」ということを何度も言ったことは覚えています。「いや、大変なことだから来たのですよ」とよっぽど言おうかと思ったけれども、そこはぐっところえて。

あのときは、たしか保安院長も入っていたのではないですか。入っていなかったか、たしか入っていたよな。入っていたね。それで、こもごも説明をしたと。

だけれども、1つは、あのときに総理がこだわったのは、法律で、どの条文にどういう文言があるのかということに非常にこだわったのですよ。こちらは、そのときは原災法の、六法なの何なの、1冊ぐらい持っていったんだよ、その保安院の人間が。ただ、その細部のあれを後でよく調べてみたら、経済産業省令のところまでこうずうっと降りているんだよ。それは、すごく細かな規定があるわけだけれども、そこまでは持っていけないから。それで、総理の執務室にいたら、福山官房副長官とか、それから枝野さんも来たかな、それから寺田君とかみんなが来て、とにかく六法を取り出して、いろいろな法律を取り出して、それをコピーしたり何したりいろいろやっているのだね。私は、そんなことじゃないだろうなと思ったけれども、まあ、総理が最後に判断をするわけだから。

それからあと、それをやっている最中、そういう法案を探している最中、今度は、炉がどういう状況なのかということについてもかなり保安院に質問があったのだよね。それについては余りうまく答えられなかった。

○質問者 今の総理が六法で見ておられたというのは、緊急宣言の根拠のことでしょうか。

○海江田元大臣 根拠というか、それから、どういう具体的な中身になるのかということだろうと思います。

【取扱い厳重注意】

私は、とにかく緊急事態だから、そして、発令をしないと、いろいろな形で、いろいろな態勢が組めないわけですね。だから、私は、発令することの方が先だろうと思ったけれども、いろいろなことをその場で、そこからもういろいろな質問がスタートしてしまったのですね。

それで、そうこうするうちに、党首会談があるからといって呼びに行つて、そのままになって、それで、その間に、こちらもその経済産業省令を取りに行つたのかな。それで、最後はそういうものを全部そろえて説明したという感じです。帰ってきてから納得してもらったということですね。

○質問者 総理の方で納得されてから、これは19時3分に緊急事態宣言の発令がなされていますけれども、総理が納得されてから、この発令までの時間というのはさほどでもないのですか。もうすぐに。

○海江田元大臣 はい、これは全く、それはそういう話だけ。

○質問者 それで、第1回の原災法の会合を19時22分まで、第1回ですので19分程度ですね。それで、これは官邸の中で行われて、終わったと。それで、この後は、その原災法の緊急事態宣言発令後の体制で事故の対応に当たっていくという流れになっていくということですね。

○海江田元大臣 そう。

○質問者 そこからちょっと時間が飛んで、こちらの方に記載があるところで、避難の関係で、一番初めの避難の指示というのが、11日の21時23分に、これは1Fから半径3キロ圏内の避難と、あとは10キロ圏内までの屋内退避という形で指示が出ているということになっておるのですけれども、ここに行くまでのいきさつというところでちょっと確認したいところなのですが、まず、海江田先生は、この避難の指示が出るまでの協議というか、内部での意思決定の過程には、その場に居合わせて関与されておられるかどうかというのはいかがでしょうか。

○海江田元大臣 これは、僕はずっと官邸にいたから当然関与しているということになるかと思いますが、15条事象で、燃料を冷やすことができなくなってくるわけだから、それで、そこで燃料が冷えなくなるとどうなるのかということで、炉の圧力が高まって云々という話がたしかあったと思うのだね。そうすると、これはやはり爆発の可能性だってあるから、それはとにかく避難してもらわなければならないということ。

それで、マニュアルのようなものがあって、マニュアルで最初にどうするのだということを知ったら、先ほどの避難、3キロから10キロは屋内退避というのがマニュアルになっていて、では、当面それでいいのだと言ったら、それでいいということだから、では、そうしようということで。これは、このときは官房長官も入っていたのかな。とにかく発表のこともいろいろあるから、みんなで相談して決めたということ。

○質問者 これは、そもそもそういう避難という措置を講じなくてはならないというような話が出たのは、どこから出たのかという。実際のところというよりも、認識としては、

【取扱い厳重注意】

一番最初にそういう話を知ったのは、どなたからとか、どういう方面からの話としてですか。

○海江田元大臣 それは覚えていないけれども、ただ、常識で言えば、15条なのだから、15条は、最悪、爆発する可能性があるわけだ。このときはまだベントという言葉は聞いていないからね。だから、ベント対応ではないのですよ。爆発ということも考えられるわけだから、爆発と言うと放射性物質が大量に大気中に飛散するという可能性があるわけだから、大量かどうかはわからない、厳密に言うとな。10条から15条事象になれば、炉が傷んで、燃料が傷んで、放射性物質が大気中に拡散するおそれがあるから、これは、近くの人には避難をしていただかなければいけないということだよ。僕は、15条事象から、緊急事態宣言が出て、それから避難というのは、これは当然一続きのものだという認識はありましたよ。

○質問者 そのときのその流れの中で、今の話し合いというのは、官房長官などもかわられたということですが、場所はどちらの方ですか。地下の中2階のところだったのか、あるいは官邸の5階の方の応接室か。

○海江田元大臣 まだ5階の応接には行っていないもの。

○質問者 その時点ではまだ。

○海江田元大臣 まだまだ。まだ地下の中2階だよ。あそこを見てきたの。

○質問者 私は、はい。

そちらの方で話し合いにかかわられた方の中には、あとは、班目委員長なんかもかわられておられるわけですか。

○海江田元大臣 班目さんと最初にどこで会ったか余り記憶がないのだね。ただ、恐らく中2階だろうと思うのだけれどもね。そのとき班目さんがどういう発言をしたかとか、どういう行動をしたかということは、余り記憶にない。

○質問者 その際の話し合いというのは、これは、例えば何キロにするかとかということで、これはいきなりもう10キロまで一気に避難するべきではないかとか、いやいや3から10キロはとりあえずは屋内退避にするべきだ、いや、屋内退避にすらすらせず、3キロまでだけを避難のみにするべきだとか、結論的には3キロの避難と10キロまでの屋内退避になっているのですけれども、そういうところで、幾つかの対案なり案が出て、そこから、やはりこうすべきではないかみたいな議論になったのか、いきなりこういうのでどうかということで、それはこれぐらいが妥当だねということでスムーズに行ったのかということ、その辺はどうだったという認識ですか。

○海江田元大臣 風向きを非常に気にしたのだよ、これは。風向きは、ちょうど夜に入っているから陸から海だよということは、もう何度も聞いていたわけだね。それで、風力は何ノットかとか何メートルかということころまでは聞かなかつたけれども、風向きは気にしたのだね。それで、海の方に吹いていますという報告を受けたことは覚えている。

あと、最初から3キロが5キロなのか、10キロなのかということは、余りそこで大議論

【取扱い厳重注意】

をやったという記憶はないね。

それで、先ほども言ったけれども、僕は、つまり15条事象、それから緊急事態宣言、最初の避難・退避の発令というのは、どちらかという和一続きのものだと思っていたから、その意味では、まず最初のステップとして、そういう3キロ、10キロというのは妥当なのかなと思ったね。

○質問者 ちょっと細かい話になるかもしれませんが、その打ち合わせ会議の中で避難の範囲を確定するための協議の中には、役人というか、緊急参集チームなんかに関係省庁が集まっておられますけれども、そういう方の中で、例えば危機管理監であるとか、中心となって避難の措置を講ずるときの実施部隊なんかも含めて、その責任者とか、そういう人たちも入っているのですか。

○海江田元大臣 最終的に決めたときには、それは入っていたと思う。だから、最初は中2階で話していて、それから、最後で決めるところでは5階に、これは総理執務室の方だと思うけれども、まだ隣のあれは使っていないから。あるいは官房長官の部屋なのか、どこかそこへ行って、そこに恐らく伊藤さんだけでも、来て、そこで話をして決めたのではないかと思うけど。

○質問者 最初からというわけではないのですか。

○海江田元大臣 最初からということではない。

○質問者 菅総理は、これは最初からそういう協議にかかわっておられたのか、ある程度その結論が見えてから、報告に行く形で関与されたのかというのはいかがですか。

○海江田元大臣 恐らく、上に上がっていくときは、もうそこは菅さんが入っているわけだから。ただ、どこで、だから、先ほどの緊急事態宣言みたいな形で、こちらでもう決めてしまって、それを報告という形ではないやな。だから、例えば中2階で、では、これで行こうと、それをすぐ、では、これを上申して、もう本部長になっているから、本部長の裁決を仰いで、これで避難指示とかを出そうとか、そういうことではない。そういう何か物事を決めてということではなくて、何とか一連だから避難しなければいかな、避難はどうなんだろう、こんなものかな、ああ、そうか、ではちょっともう一回行って相談してみようみたいな感じだな。感じで物を言っただけでもない。

○質問者 若干戻って恐縮ですけれども、さきに言われた総理のところは原災法15条の事態、それから緊急宣言発令、いろいろこうやりとりの中で、結局、途中で与野党会議の方にいられて、帰ってこられて了承と、1時間ぐらい間があると思うのですけれども、まさに大臣としては、緊急です、すぐやるべきです、だから対応に行かれたわけで、その1時間の対応のラグというのはいらいらされたのではないかと思うのですけれども、そのことと、その後の結果、先ほどの避難措置の発令が遅れますね。その因果関係、そのあたりは当時どんなに思われて、あるいはその後を見ると、やはりちょっと遅かったのかどうかという、そのあたりの御判断はどうでしたでしょうか。

○海江田元大臣 この原災本部をつくりますと、一つのポイントは、経済産業省の副大臣

【取扱い厳重注意】

を現地対策本部長に任命して、そして現地に飛ばすことなのですよ。私は、申し訳ないけれども、当然のことながらすぐ許可が下りると思ったから、池田さんをお願いして、まだ許可が下りる前に、とにかく現地に向かってくれということを行ったんですよ。だから、許可が下りたのは7時ぐらいですけども、もう少し前から彼は恐らく出ていたはずですよ。ところが、陸路で行きましたから、結果的に、また戻ってきて、市ヶ谷からヘリコプターでしたけれどもね。

だから、その意味では、もしそれができるのを待っていてそれでやっていたら、これはもっと遅れたでしょうね。だから、それはもう、後処理で副大臣以外ないわけですから、副大臣に、とにかく現地に行ってくれということで行いました。ただ、その陸路をとったというのは、ちょっと残念でしたね。もっと早い段階で空路にしておればまだよかったのかなと。結局着いたのは12時ですからね。そういうことはありました。そこは、もうしようがないから、判断して行ってもらいました。

○質問者 与野党会議も大事でしょうけれども、この緊急事態であれば、こちらのほうを優先すべき話かなと思われませんが、それは総理の判断でしょうからあれなのでしょうけれども、どうかなと。

○海江田元大臣 だから、余り言いたくありませんけれども、「プロメテウスの罠」なんていうのを時々読んでいたら、何か、原発は自分がやるから全体を官房長官がやってくれと言ったとか言わないとかという発言が出て、あれを読んでびっくりしましたね。まさかそうだとは思わないから。それは逆なのではないかと思いましたがね。

○質問者 この段階の大臣たちの御認識なのですけれども、炉は悪くなっていくと。時間的にどのくらいゆとりがあるのだろうかとか、例えばどのくらいの時間で判断しなければいけないのか、その辺の御認識なり情報の御理解等、どんなイメージだったのでしょうか。

○海江田元大臣 それは、特に中2階に行きましたら東京電力の武黒さんというフェローの方が来ていましたので、東京電力の武黒さんに、そういう時間軸の話、それから、これは保安院もある程度、そういう時間軸の話はしていたと思うのですね。全電源の喪失から、水が減って行って、炉心がだんだん出てきて、それで圧力が高まって、その圧力と設計上の圧力が何時の時点かというと、そういうシミュレーションは聞いていました。それは中2階にいて。勿論、緊急事態の宣言が下りてから。だから、それは非常にあせっていたことは確かです。

○質問者 1時間、2時間を争うとか、あるいは30分を争うとか、そんな感じでは。

○海江田元大臣 その時点ではまだ聞いていませんでした。

○質問者 繰り返しますが、池田副大臣が行かれるのが遅くなったぐらいの実質的な影響でしたでしょうか。1時間のタイムラグということ。

○海江田元大臣 だから、池田さんはそれで先に出てくれましたけれども、あと、今回、その遅れたことが原因かどうかということはわかりませんが、現地対策本部長に、実は委任をしなければいけない、権限委任があるのですよ。それが、実はやられていない

【取扱い厳重注意】

のですよ。私はそのことも、それは、着いたことが遅くなったこととも関係が全くないわけではないと思うのですけれども、あれをもうちょっと早い段階でやっておけばよかつたのかなと。

○質問者 根拠レスのまま進んでしまっているのですね。

○海江田元大臣 そうなんです。だから、全くそこは本当に、勿論緊急事態ですから、そういう法律の決まり事だけでやるわけにはいきません。それと、あともう一つは、オフサイトセンターがああいう形で電源が失われたということも勿論あります。ただ、そこどころの、やはり、まず緊急事態の宣言をやって、そして、本部長の池田さんをすぐ指名して、そして、それならば、すぐ自衛隊にも連絡がつくわけですね。そうでないと、最初の時点ではあれが出ていないわけですから、陸路で行くしかないわけです。混乱していますから。それで、自衛隊で行って、早く入ってもらって、そして体制を整えて、どここの権限は総理から現地の対策本部長に委任するというのがとれば、僕は一番いいかなと思いましたね。

○質問者 現場に行ってから時間軸の話はいっぱいあるのですけれども、その時点では、例えば1号炉については、一応非常用注水にしているのだ、水が入っていますよとかというお話はありましたか。

○海江田元大臣 ええ。だから、たしか最初は2号炉ではなかったかな、気になっていたのはね。一番気になっていたのは2号炉だろうと思います。

○質問者 たしか2号炉でしたね。

○海江田元大臣 そうです、2号です。だから、2号炉が何時何分とか、私も自分でつくったものがありますけれども、どういう時間軸でということは、これは、たしか武黒さんから聞いたのだらうと思うのですけれどもね。夜の9時過ぎ、東京電力から保安院に対して2号機の事態進展に対する評価ですね。それで、21時40分ごろ、炉心を冷やす水がどんどん減って水が燃料棒の上端に達すると。それで、22時20分ごろ、炉心の損傷が始まる。23時50分ごろ、原子炉の压力容器が破損というような言い方ですね。

○質問者 そういう見込みですね。

○海江田元大臣 これは、そういう見込みという。これは、僕は聞いた覚えがあります。これは大変だと。たしか2号炉でした。

○質問者 当初は2号炉の方がむしろ危険なのではないかという御認識で、1号、2号を問わず、まずはベントですね、このベントの話が出てきた。少なくとも海江田先生の方で御認識している中で、一番最初にそういう話が出てきたというのは、どういうきっかけで、いつごろ出てきた話なのですか。

○海江田元大臣 ですから、今の予想を聞いて、では、どうすればいいのかという話になったら、そこで、まずベントをやって圧力を逃がすことだという話で、そのとき「ベント」というのは初めて聞く言葉で、申し訳ないけれども。それで、そのとき聞いたので覚えているのは、ベントには2種類あって、ドライベントとウェットベントがありますと。この

【取扱い厳重注意】

場合はウェットベントですから、水を通しますから大気中に広がる放射性物質はそれほど多くないのではないかなと。それほど多くはならないはずですよという話になって、では、とにかくベントをやってくれと。それで、ベントをやりますという話になっていくのですね。

○質問者 そのベントの説明というのは、武黒さんというか、東電の方から。

○海江田元大臣 武黒さんですね。

○質問者 当時は、そのベントについて、当然そういうことであれば是非という話であった、そのきっかけ、2号機ということですからけれども、1号機についてもそういうベントが必要だというような認識になるのは、どういうきっかけからですか。

○海江田元大臣 1号機は、先ほど言ったように、若干水があれしたのですね。緊急の。

○質問者 IC、非常用復水器が。

○海江田元大臣 そう。ICが機能していたから、とにかく2号機だという話でいったのではないかな。

ただ、はっきり言って、そのときは、完全に1号機が平気だということでもないのですね、これは。だから、僕の記者会見のときの言いつぶりが、非常に微妙な言いつぶりをしているのですよ。

○質問者 これは、未明の3時の。

○海江田元大臣 そうそう。あのときはまだ何号機ということ、これは、まず、「このたびの事故により、福島第一原子力発電所において、格納容器の圧力が高まっていることから、ベントを開いて内部の圧力を放出する措置をとるため事業者である東京電力から報告を受けた」と。「この作業に伴い容器内の放射性物質が大気中に放出される可能性がある。事前の評価ではその量は微量と見られており、現在、陸地から海側に吹いている風向きを考えると、現在とられている発電所から3キロ以内の退避、10キロ以内の屋内退避措置により住民の安全性は保たれていると思う。落ち着いて事態に対処していただくようお願いする」と、これは1号、2号を言っていないのです。だから、このときはまだ1号のことも若干頭の中にあっただことは確かなのです。

○質問者 時系列にちょっと記載させていただいているのですけれども、3月12日の零時57分のところ、これは、実際はもう少し早く保安院には報告しているみたいなのですが、零時57分に、1号機については、格納容器の圧力異常上昇ということで、15条事象ということで更に報告をしているということがございまして、それで、実際にこのころ、ドライウエルの圧力が非常に上昇して、計測上はされているというところで、1号機についてもベントをしなくてはならないというような状況にあって、むしろ現場では1号機が危ないというような話になっていたみたいなのですが、この後、1時30分ころに東電の方から総理に対して、1号機と2号機のベントが必要なので、その了解を得たというようなお話があるのですが、その場に海江田先生は同席されたかどうかの御記憶はありますか。

○海江田元大臣 いや、していないと思うね。

【取扱い厳重注意】

- 質問者 当時、この記者会見の前は、どちらにおられたという記憶ですか。
- 海江田元大臣 僕は、まだ中2階だろうと思うな。
- 質問者 記者会見のときに。
- 海江田元大臣 経済産業省に戻って、経済産業省で記者会見。そのとき小森さんも来て、小森さんと一緒にやったのだな。それからあと、寺坂さんもそこに入っていたな。
- 質問者 これは、東電と共同で記者会見をするということが決まった経緯というのは、どういうことだったのですか。
- 海江田元大臣 東電は実施主体だという話で、それで東電も、ベントしかないからベントをやると言っていたから、では、実施主体である東電さんもやってくれと。それで、私としては、これからやる、初めてのことだから、全く政府が黙っていて、東電がやりますよというわけにはいかないだろうから、やりますと。だけれども、ここに、今、読み上げたように、とにかく、なるべくその影響は少なくするし、これは爆発を未然に防ぐためのものであるから、内部の圧力を放出するベント弁を開いてということだから、万やむを得ない処置だから了承してくれ、落ち着いて対処してもらいたいと。それは、やはり政府として言わなければいけないから言っておいたのだね。
- 質問者 このころ、その3時6分ごろの御認識としては、共同記者会見の後、間もなく、もうベントがなされるという御認識でしたか。
- 海江田元大臣 はい。だから、恐らくここで、1号機が15条という話だけれども、これが1時何分という話だと、ほぼ1時だね。零時57分だけれども、事態宣言が終わって、あの中に戻って、先ほど言ったように東電や保安院から事態の推移を聞いていて、もうそこから僕の頭の中はベントという話で、それは東電側とも一致しているわけだから、日付が変わるころからか、とにかくベントをやってもらえないとずっと思っていたね。それで、向こうもやってくれと言っていたからね。
- 質問者 ベントということになると、制御された形とはいえ大気中に放射性物質が放出されるということになるので、避難の区域をどうするかという話にもなっていきそうな気がするのですが、そういった避難区域を拡大すべきか否かという議論というのは、どのころから出てきたのですか。
- 海江田元大臣 だから、ベントと避難の話は、それはほぼ並行して議論していたと思うけれどもね。ただ、最初のときの基本的に3キロというのが、あるいは先ほどお話したように、これはベントではなかったわけだから、そこの関係で、それでいいのかとって、それで、あれは何時に出したのかな、2度目の。
- 質問者 5時44分に10キロ圏内に拡大。
- 海江田元大臣 5時44分に10キロ圏内に拡大したのか。だから、問題はそこのところなのだよな。
- 質問者 この避難指示を出されるまでの過程、協議なんかには、海江田先生も御臨席されて、お話をされておられるのですか。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 はい。何。

○質問者 この5時44分に避難指示を出されるという形になっているのですが、この避難指示に至るまでのいろいろな、そういう必要があるのかどうかとか、では10キロ圏内というところで行こうというような意思決定をされる、その過程には関与されておられたのですか。

○海江田元大臣 入っていたと思うよ。

○質問者 それは、官邸の中で。

○海江田元大臣 官邸の中です。

○質問者 そのときは、これは、この日の朝方、総理は1Fの方に、1Fとその周辺、東北の方に現地視察に行かれておられると思うのですが、この避難について10キロ圏内まで拡大しようというような意思決定のときまでは、まだ実質的にそれが決まるまでは、菅総理もその意思決定にかかわっておられたのですか。

○海江田元大臣 それはそうだと思うよ。

○質問者 では、これは、このときの10キロまで拡大するということについては、何かほかの案が出たり、要するに、いや、それはちょっとということなのか、もうベントが済んだから広げておいた方が無難であろうと。10キロぐらいまでは、当初の防災計画なんかでも、あらかじめマニュアルで一応予定はされておることだと思われるのですけれども、その目いっぱいのところで行こうというところになったのか、どういう経緯で10キロに。

○海江田元大臣 1つあったのは、やはり避難が夜間だということだね。それで、夜間の避難だから、これは十分周知徹底をやらなければいけないわけだから、その周知徹底を確実にやらなければいけないということで、そういう状況について、どういう形で避難をやっているかということ、既に3キロは出ているわけだから、それは危機管理監なんかから話は聞いているね。やはり警察と、あのときは自衛隊も絡んでいたかな、とにかく警察が主だったと思うけれども、どうやってやっているのだというようなことは聞いた覚えがあるね。

○質問者 それは、この10キロ圏内まで拡大すると決まる前ですか。

○海江田元大臣 前の話だと。

○質問者 その際の担当、実施を責任持ってやる役人側の方の答えとしてはどうだったのですか。こういう朝方の早い段階で避難指示を出すことによって、地域の住民に与える影響とか、混乱を招かないだろうかとか、その辺の話になると思うのですけれども、何とか、是非避難区域を拡大する必要性と、それを何とかやりましょうというような話だったということですか。それとも役人側は。

○海江田元大臣 そこはちょっとわからん、覚えていないのだよな。とにかく朝方に10キロだから、それまでは3キロで、3から10キロまでの間の人たちは家の中にいたわけだから。だけれども、やはりその人たちも出した方がいいということになって出てもらったわけだよな。

【取扱い厳重注意】

○質問者 このころ、ちょうどその避難指示が出るころというのは、ベントをしますよという記者会見がなされた後、2時間以上たっていますが、いまだそのベントがなされたという報告はないという状況であった。

○海江田元大臣 ない。

○質問者 そのころの海江田先生の御認識として、なぜベントにそんなに手間取っているかとか、もうこのころからそういういら立ちとかいうか、そういうものというのはございましたか。

○海江田元大臣 いら立ちという言葉がいいかどうかわからないけれども、とにかく、何でベントができないのだろうかとずっと思って、恐らくその間に、とにかく現場に電話してみなければいけないというので、これは現場に、これは中2階に黒い電話が1台あったから、御承知のように、中2階は携帯が全然つながらないから、その黒い電話で何度かつなげていて、それで最後に吉田所長と連絡がついたから、吉田所長と直接電話で話したよ。「とにかくベントをやってくれ」「わかりました、全力を挙げてやります」と。決してという言葉は使わなかったけれども、やはり夜間で電源が失われて真っ暗である、それから線量は高くなっている。だけれども何とかやってくれ、「わかりました、やります」ということは聞いて、それでそのときは、「やったらすぐに連絡をください」ということは言いましたね。

○質問者 その際、吉田所長から、なぜベントに手間取っているのかということについての説明のようなものはございましたか。

○海江田元大臣 だから、まず、電源が失われているということがあって、本当は、これは吉田所長から聞いた話ではないけれども、中央制御室が生きていれば、ボタン1つでベントは簡単にできるのだけれども、それはもうできない。人力でやるしかないという話で、人力で行くのに線量が高いということと真っ暗な中での作業だということで、とにかく必死の努力をしていますということで、是非お願いしますと。それで、「終わったらすぐ連絡をください」「わかりました」ということで、その電話は終わりましたけれどもね。それは、たしか総理が行く前でしたね。初めて吉田所長と話をしました。

○質問者 では、時系列の中では、6時50分に「海江田大臣主導による1号機原子炉格納容器ベントを実施するよう炉規法第64条に基づく措置命令」ということで、これは保安院の内部的な時系列なんかでもこのように整理されているのですけれども、これは、一応、手動ベントを炉規法上の措置命令として整理されているみたいなのですが、これよりも前の段階から、吉田所長と直接お話をされて、是非やってくれというようなお話だったということですか。

○海江田元大臣 はい。だから、先ほどお話しましたけれども、ベントは、実施主体が東京電力だという、これは、ああいう緊急事態で、すべて実施主体を事業者に任せておいていいのかということは、反省として僕はあると思うのですね。だけれども、現行法を守るということであれば、緊急事態であっても、事業主体がまずやりますということをおわ

【取扱い厳重注意】

ないと、これはなかなかできないと。だけれども、措置命令というのは、これはあるわけで、だから、向こうがやると言ってきたから、では、やってください、早くやってください、まだできていませんと。理由はいろいろありますけれども、強いて言えば、これは後の海水のときもそうなのですけれども、やはり、ベントも初めてのことで、大気中に放射性物質を、水を通すことによって減災されるとはいえないわけですから、そうすると、やはりかなり大変な事故だということが知れ渡ってしまうことに対する懸念みたいなものがあるのではないだろうかというような東京電力に対する疑念があったことは確かですね。

だから、僕は直接現場に、それまではずっと武黒さんを通して、武黒さんが本店に連絡をして、本店から現地の連絡も聞いていましたから、そういうルートでやっているのだなと。だけれども、ひよっとすると本店が渋っているといけないから、時々現地に聞いてみるといって現地に電話させたわけですよ。そうしたら、現地はやると言っていたけれども、なかなか進まないから、何かそんなちゅうちよがあるのかなとは思いましたね。

○質問者 そういう疑念があったこともあって、命令とかをされたわけですか。

○海江田元大臣 そうです。これはもう、それでやらなければだめですから。

○質問者 当時、海江田先生の近くにいる東電の人間としては、武黒さんであるとか、**■**部長とか、そのあたりの方々だったと思うのですが、このあたりの方々のベントに対するとらえ方というのですか、例えばそのベントをなかなか、世界初でやるわけですし、影響も大きいので慎重にというような、ちょっと慎重論的な意見をお持ちになっているような節があったのか、あるいはそうではないのか、どのように。

○海江田元大臣 彼らはそんなにあれではなかったと思います。やるしかないと思っていましたけれども、結局連絡方法が、そこの官邸の中2階でいろいろ話していて、時々いなくなつて、外に出て行って、恐らく電話して本店にやっているのでしょう。だから、そういうものも非常にまどろっこしかったです。だから、そこの本店がどういう意向を持っているのかというのはわからなかったですから。本店とはほとんど私は直接連絡をとっていませんでしたから。だけれども、場合によっては、何か本店がためらっているのかな、それだったら現地の吉田さんに話してみるしかないから、とにかく電話をつないでくれということと言って、電話をつないで、こちらの意思をはっきり伝えたということですね。

○質問者 その後、措置命令が出た後ですけれども、今度は、福島第二原発の方の緊急事態宣言の発令、それから避難指示というものが、これは3キロ圏内と10キロ圏内ということで、ちょっと1Fよりも少し時間が遅れて同じような経過をたどっているのです。それで、この緊急事態宣言発令の手続であるとか、あるいは避難指示というのは、この朝方ですね、この時点では菅総理が視察に行かれておられると思うのですが、これが決まる過程というところには、海江田先生はかかわっておられましたか。

○海江田元大臣 この第二発電所については余り記憶はないのです。それは、御承知のように、第一と第二が離れている、それから、第二は第一のような直接的な津波の被害が

【取扱い厳重注意】

ないということを知っていましたから、その意味では、ただ、安全性を確保する意味で、第二についても出した方がいいという判断ですね、これはね。

○質問者 今の避難指示の関係で、原災マニュアルがございませぬ。それによると、もともとは現地の対策協議会で避難指示案を上げてきて確認する。それができない場合には、今度は経済産業大臣が、内閣危機管理監とか保安院、防災担当大臣が立ち会いた上で案をつくって、最終的に原災本部長の決裁を受ける、こういう立て付けになっておるわけです。

そういう立て付け自体は御存じであったわけですか。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 でも、実態はどうもそうでもなさそうな動き方をされているのですが、それは、原災マニュアルといえますか、あれは原災法の立て付けにちょっと問題があるのか、当時の極めて緊急事態に対応できるようなものではなかったのか、そのあたりの動きをちょっとお聞かせいただきたいと思うのですが。

○海江田元大臣 先ほどもちょっとお話ししましたけれども、やはり現地対策本部が非常に大事で、まさに退避の命令も現地対策本部長に与えるわけです。そうすると一番わかっていますから、最初に出した指示が今どの程度浸透していて、どの程度進んでいて、どこが不足しているから、では、出すのはいいけれども、ちょっと待ってくださいという意見が出てきたりして、それで、では、わかった、では、そこは任せてあるのだから、あなたのところで判断してやれ、これで済むわけですね。

だから、その一番根っこのところがしっかりできなかったものですし、これは物理的な理由もあろうかと思えます。自治体、自治体の人たちも参集できなかったと。どこか一つだけですか、集まったのは。あとほとんど集まらなかったということがありますから。だから、そこで何かあいまいになってしまったというようなところもありますね。

退避というのは、勿論これは被ばくを防ぐためのものでありますが、混乱して、家の中にいて被ばくを防ぐ方法と、やはり混乱して、外に出て、そこで被ばくするというケースもありますから、ここはやはり非常に難しい判断だと思うのですね。それで、現地の様子をよくわかっていないとなかなか。

だから、私が心がけたことは、できるだけ保守的にといえますか、少しは余分だと思ってもいいけれども、やっておこうということは思っていました。だから、第二のときも、考え方からするとそういうことですね。余り必要ないかもしれないけれども、ここはやはりやっておかなければいけないと思えましたね。

○質問者 それから次に、ちょっと飛びますけれども、その後、3月12日、1号機に関しまして9時ごろ以降、ベントの作業に実際に着手していくと。ただ、いろいろと思わぬ事情もあって、なかなか弁が開かないというような状況がどうも現場であったようで、それから、他方で、ベントの準備をしながら、淡水をずっと断続的に入れていたようなのですが、12日の14時53分と東電の方は記録を残していますが、淡水が使えるものは全部使い切

【取扱い厳重注意】

ってしまうと。実際には、その後、海水注入に向けた準備を吉田所長以下はされておられるようなのですけれども、この海水注入の準備を15時前後ぐらいからずっと東電が爆発のときまでされていることについては、当時、御認識はございましたか。

○海江田元大臣 当時の現場の事情というのは、吉田さんと電話で話した我々にすれば全部、武黒さん、あるいはもう一方の■■■さんしか入ってきていませんから、彼らはそのことは、私ととにかくずっと一緒にいましたから、淡水がなくなって海水ですということでは意見は一致していたのですけれども、海水の作業とか、もうそういう準備をしているとかということとはわかっていなかったと思いますね。というのは、私は、もう今、準備していますからということを書いてきたかどうか、そのところの記憶が余りないのですね。

○質問者 保安院の残されておられる記録の一部には、12日の15時4分ごろに、海水の注入をいつまでもやらないのであれば命令を出すと海江田先生の方が発言されたというような記録が残っているのですけれども、なかなか海水を入れないなというようなことで、またその命令というのは、恐らく炉規法上の措置命令ということでしょうけれども、そういったお話をされた御記憶はございますか。

○海江田元大臣 それは覚えています。だから、そこでも非常にためらいが何かあるのではないかなど。だから、先ほど言いました、海水を入れれば、当然炉が傷みますから、もうこれは即廃炉です。海水を入れた炉がもう一回稼働なんていうことはあり得ない話ですから。だから、それももう非常にためらっているのではないかという一種の不信感がありましたから。その現場の情勢が入ってきていませんから。そのときは、海水のことは吉田さんに電話したことはありませんから。だから、それなら、もうこれは廃炉に決まっているのだから、とにかく海水を入れろ、いつまでもやらないなら命令するぞということは、何回か発言しましたよ。

○質問者 そういった海水を入れるのをためらっているのではないかと思う根拠としては、例えば、東電側の武黒さんなり■■■さんなり、あるいは別の人でも結構ですが、そういった方々の何か言動、言葉や行動から、「あれっ、ちょっとそうなのではないかな」と思うような節というのはございましたか。

○海江田元大臣 武黒さんや■■■さんは、私と一緒にいて、とにかく淡水が切れたら海水にすべきだ、それしかありませんということを書いているから、私はそうだよと言って、そういう手順で進むのだと思っているのだけれども、いつまでたっても海水が入ったという連絡が来ないわけですよ。

そのとき私が思ったのは、結局、東電の本店の指揮命令がどうなっているのかなということ。これはひょっとして、不信感と同時に、何か物事を決められないのではないかと思ったのですよ。というのは、あのときはまだ、清水さんたちは帰ってきていたのかな。

○質問者 清水さんはもう。

○海江田元大臣 帰っていたか。

○質問者 清水さんが帰ってきていたのですね。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 帰っているの。それで、あとはそのままだな。そうだな、清水さんは入っていたのか。恐らく、ベントのときにはまだ帰ってきていなかったのだな。そうなんだね。だから、本店が何を考えているのだろうかと思ったことは確かですよ。

それで、清水さんが、こちらがベントでわあっとなっているときに1回電話がかかってきたんですよ。それで、実は自分がまだ帰れないでいるのだ、名古屋にいるのだと。それで自衛隊の飛行機を飛ばしてくれないかという話になってきて、幾つかちょっとできるかどうか聞いてはみたけれども、無理だったので、それは無理だ、とにかく自力で帰ってきてくださいと言ったら、その日の夜になって、あれは夜だったと思うのですけれどもね。だから、そんなことを言っているようでは、これは本当に当事者能力があるのかなというのも実はあったのです。

勝侯さんが中国に行っているとか、そんなことは全然知らなかったけれども、少なくとも社長がまだ、15条事象が起きて、みんなであれやっているのにね。だから、プライベートセスナでも何でもいいから、とにかく借りて帰ってきてくださいと言ったことだけはあります。その前の日にね。だから、東電の本店は一体どうなっているのだろうかと思いましたがね。

○質問者 そういうことが重なって、また、海水の注水もなかなか実現しないので、もしかして、また本店のその指揮命令系統も含めて、何か遅れている原因として、不信感というものからそういうところまで考えて、廃炉をためらっているのではないとか、そういう考えもこの当時はおありであったということですね。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 それで、その後、この1号機が爆発を起こしまして、その後、これは爆発を起こしても、引き続き水を入れるという方向で行かなければいけないと思うのですけれども、実際に、この記録によると、今の海水の話なのですけれども、現実には17時55分ごろに海江田元大臣が、1号機原子炉内を海水で満たすように炉規法64条に基づく措置命令を出されたということになっておるのですけれども、これは、その爆発を知って、その後、その次にとるべき対応として、国として、国というか、所管の官庁としてどういった対応をとるか、要するに東電に事故をできるだけ緩和させるためにどうすべきかというようなことの検討を、経済産業省の担当する保安院とか、そういう人たちとお話をされた上で、では、とにかくまず海水を入れるのが先決だということで措置命令を出されたのか、あるいは、そんなものではなくて、官邸の中にいるときにいろいろな人と話をする中で、やはり早くやらなければいけないから、まず、その措置命令を出しておこうという話になったのか、その役所側と話した上でこういうものなのか、どういう経緯でこの措置命令はなされたのか。

○海江田元大臣 私は根っからの文科系の間人ですけれども、原子炉に事故が起きて、燃料棒がおかしくなり出しているという状況だと、やはり水で冷やすしかないということぐらいはわかっているのだよ。別にそのくらいはわかっているのです。話を聞けば、みんなわかるでしょう。専門家ではないけれども、とにかく水で冷やすと。水で冷やすのは、最

【取扱い厳重注意】

初は淡水が一番いい。そのための淡水もあるけれども、それが切れれば、今度はもう海水でも何でもいいから冷やさなければだめだという、そんな難しい話ではなくて、議論する話ではなくて、とにかくそういうものだと思ったから、それは海水でいっぱいにして冷やすと。

それで、そんな命令とかは余り出したくはないけれども、いつまでもやらないのなら、これはきちんと、やはり記録も残さなければいけないから、そばにいた、あれは佐脇君にだろうと思うけれども、「何時何分、いいか、これは命令だから、もう出したからな」と言って、それは強制的に言ったわけだ。そうしないと、やはり責任をとれなくなるからね。だから、それはごく自然に、何かえらい議論をやって、それでそういう結論に達したとかということでもなしに、圧力が高まっているときはどうすればいいのかということとは、これはベントなんていうものがあると知らないから、それは聞いたら、ベントだという話で、それで、ベントで、圧力が高まったら格納容器の圧力を逃して爆発を防ぐ。それから、とにかく炉が傷まないようにするためには水で冷やすしかない。水は、淡水が切れたら海水だという、ごく単純などいうか常識の線で判断したのですね。

○質問者 そういったことで判断をされて、これは、特にこの直前とか、その爆発後、その前ごろに、何か東電の方が、やはり海水について拒むようなエピソードがあって、いや、それはだめだといって出したというわけではないと。

○海江田元大臣 なくて、これもベントのときと同じだけれども、そこにいた武黒さんも■■■■さんも、これは、淡水が切れたら海水でと言うから、海水が入るものだと思うたら、いつまでたっても入ったという報告が来ないから、どうなっているのだということで、いつまでも入れないのなら命令を出すぞということを使ったので、淡水から海水への切り換えが何か大きな次の事象にわたるようなことだとは、僕は全然思っていないのだね。

○質問者 それでは、この措置命令よりも若干戻りますけれども、その直前ぐらい、17時39分、これは措置命令を出すよりも16分ぐらい前の話になっていますけれども、2F、第二原発から半径10キロ圏内の避難ということで、それまで屋内退避であった3ないし10キロ圏内の部分を、これを避難という形に拡大して指示をされているのが残っているのですが、この経緯はどうだったかというのは。

○海江田元大臣 1つ、ちょっと細かなデータとか記憶がないのだけれども、モニタリングポストだな。とりわけ第一の正門のところのモニタリングポストというのは、結構数値は入ってきていたのだね。だから、これはモニタリングポストが、特に1号機が爆発してから、これはやはり上がったのだね。だから、第二のところのモニタリングポストがどうなったのか覚えていないのだけれども、そういうものがあつたのかな。ちょっと申し訳ない、そこは本当に抜け落ちているな。

○質問者 これは、例えば、細かな話はさておき、1Fの1号機の水素爆発が引き金となつて、こういった避難の拡大になったということではないのですか。それとも、2F固有の何か事情があつて。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 いや、2F固有はないと思います。それで言えば、やはり1号機の水素爆発だ。もう想定していないのだから。

○質問者 そうすると、その後の話になりますが、これもマスコミ報道でかなり、国会の中でもいろいろあったと思うのですけれども、その後、要するに措置命令を出された後になると思うのですけれども、海水を入れる、入れないというところで、菅総理なんかも交えてお話をされる場面というものがあったと思うのですけれども、これは、そもそも経済産業大臣として、措置命令でもう入れろと事業者に対して命令をするというところまでで完結しているようにも思われるのですけれども、そこに、重ねて菅総理らがそのところにかかわってくるというのは、これはどういう経緯でそうなっているのですか。

○海江田元大臣 だから、僕は自分のできることだと思ったから、自分で判断して、命令を出して。だけれども、報告に行かなければいけないから、それは全般的なことの報告に行き、そのとき、たしか班目さんも入っていたのだ、それから武黒さんもいた。

そうしたら、僕にとっては予想もしなかったのだけれども、いわゆる再臨界問題が出てきたわけだ。こちらは、海水を入れて再臨界なんていうのは全然わからんわけよ。だから、恐らく、ここからは推測だから余り、直接あれしたわけではないけれども、とにかく再臨界になったらどうするのだという質問が出たことは確かなんだよ。だから、恐らく1号機が爆発したので、それはだれも、班目さんも、保安院も、東電のだれも言っていなかった。だから、どうもこいつらの言うことは当てにならないなということで、菅総理は、いろいろなところ、ほかの人から意見を聞いていたというのは僕も聞いているんだよ。僕は余りほかの人から意見を聞かなくて、少し落ち着いてからいろいろな人から聞いたけれども、最初のうちはもうそこだけでやっていたから。

それで、突然その再臨界の話になったから、班目さんも、それにうまく答えられなかったのだね。絶対ありませんとは言えなかったのだよ。絶対ないのかと言われると、やはりそれは、1号機で言わなかったわけだから、想定外のことがあったわけだから、「絶対ないと言えるのか」と言われて、「いやあ」とかなんとか、「全くないとは言えません」ぐらい言ったのでしょね、恐らく苦し紛れに。

それで、そうこうしているときに、これは、副社長の武藤さんが国会で答弁したので、僕はそれを聞いていて、ああ、なるほどなと思ったのだけれども、武藤さんはそのとき向こうにいたわけですよ。オフサイトにいたから。あの武藤さんは、結構いろいろなことを知っていますから、あの方から本当のことを聞くといろいろわかると思いますけれども。

それで、後で、そのときは向こうにいたけれども、本店とオフサイトの間では、テレビ電話もあるし、どうもその場にいた武黒さんが、官邸の総理執務室でのやりとりを聞いて、海水注入のような細かいことまで総理のOKがないとこれはできないと。だから、ちょっと待ってくれということをおそらく武黒さんが本店に連絡をしたのではないかというので、ああ、なるほどなど。

僕は、武黒さんが途中でいなくなったことなんかは全然覚えていないけれども、だから、

【取扱い厳重注意】

こちらはその命令はずっと生きています。だけれども、東京電力から、もう海水に切り換えましたという報告も入っていない。だから、ずっと作業をやっているのだなど。だけれども、作業をやっているのにまだ報告が来ないから、その意味では、海水が入って再臨界の可能性があるのかなのかということについては、班目さんと、それからあと総理の間でやっているから、僕はそれを聞いていたのですね。だけれども、海水で再臨界するのかなと思って、余りしないのではないかと思ったけれども、僕は専門家ではないからわからないから。だけれども、その命令は生きていますはずだから、まあ、そういうのを聞いていたのだけれども、恐らくそのとき、そばに武黒さんもいたし。

官邸の5階というのは、総理執務室があると、そこからすぐ外へ出ると、それはもう携帯電話はつながるのでね。だから、そのとき出て、武藤さんの国会での発言によると、そういう会議の様子を聞いて、武黒さんが本店に連絡をして、とにかく今ここで海水を入れたりしたら独断専行してしまうようなことになるから、それはとめてくれということを行ったと自分は聞いているということを行っているから、僕はそれを聞いたとき、ああ、そういう構造になっていたのかなと思ったのですね。

○質問者 では、そのときの、まず、その場所は総理の執務室の中でのお話だったわけですね。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 そのときに、一番最初の持っていき方、要するに炉規法の世界の中で措置命令まで出したということについても、御報告をされているのですか。

○海江田元大臣 したと思いますよ。それから、それだけではなくて、大体、何時間か一度、上に上がっていろいろな報告をしましたから。それで、とにかく海水を入れなければいけないと思いますがということは言いました。淡水から海水へということで、今その作業をやっているところですよということを報告したはずですよ。するとそこで、ちょっと待て、海水で再臨界の可能性はないのかという話になったのだね。

○質問者 そのときの海江田先生の当時の認識としては、命令は出したけれども、そこから、では、その命令に従って入れましたという報告がないので、まだ準備中なのだろうという程度の認識で、実際に水が入っているとまでは思っておられなかったということですね。

○海江田元大臣 私はそうだったです。

○質問者 それで、結局そういう再臨界の可能性はあるのではないかとところで、班目委員長の方も、ないとまで断言ができなくて、それで、ちょうどそのころに、これを見ると、18時25分に避難指示ということで、20キロ圏内の避難に拡大という話になっているのですけれども、これは、同じその場面で、海水注入の話なんかと同じような、同じときの機会に話し合われたことなのですか。

○海江田元大臣 あれは何時までやっていたかな。だけど、それは一連の流れの中だと思います。

【取扱い厳重注意】

○質問者 これは、どういう流れでこのような話になったのかということ、例えばその再臨界の可能性という話になれば、やはり海水注入することによって危険なのではないのかと。それで、念のためにちょっと広げた方がいいのではないかというようなことに、要するに、より危険なことが起こり得るということであれば、安全側に考えてという話になっているのか、何か、どういうつながりで。

○海江田元大臣 20キロ圏内の避難が出ているのが18時だよな。第一原発ね。

○質問者 はい。

○海江田元大臣 その前の第一原発10キロが12日の5時44分だね、これね。5時44分。そうすると、この間で変わっていることというのは。

○質問者 一番大きいのは爆発です。

○海江田元大臣 やはり水素爆発だな。これだろうな。避難指示な、そう。

○質問者 爆発があって、また、恐らくだれも予想していなかったわけですから、今後どういう挙動をプラントが示すのかということも、恐らく確たるものは持てない時期だと思われるのですけれども、そこにこうやって海水を入れるというような話は。

○海江田元大臣 だけれども、海水とこれとは直接関係ないと思う。

○質問者 直接はないですか。要するに、その再臨界の可能性ということなんかが出たときに、例えば、海水を入れる、入れないにせよ、このときの、では、1号機の水素爆発となっているのですが、この18時から19時ころの間、1号機が爆発したことは映像からして明らかなのですけれども、その原因として、なぜ爆発が生じたのかということについての御認識はどうだったですか。

○海江田元大臣 このときの爆発、最初は、何でかよくわからなかったんだね。ただ、炉の爆発ではないということはわかったわけだよ。

○質問者 これは、なぜわかったのですか。

○海江田元大臣 だって、炉が爆発したらもっと大変な爆発になるわけだし、要するに、炉が爆発したら、そのときに水を入れたって余り意味がないものかもしれない。それで、現実に、いわゆる炉の爆発ではなくて建屋の爆発だという話なわけだよ。ただ、建屋が爆発すれば、建屋というのは、それは4番目か5番目の防御施設なわけだから、それが爆発すれば、それこそ、特に天井がすっ飛んだりすれば、放射性物質を浴びた水蒸気がどんどん出て行って、これはかなり飛散をするからという話があったから、これは、時間的にいっても、やはり水素爆発が起きたということで、そのほかの動きも起きるかもしれないという話で、やはりこれは、一番安全性の側に立って、もう20キロをやった方がいいと。

基本的に、避難・退避に関しては、できるだけ安全の側に立って、勿論夜だから混乱はあるかもしれないけれども、安全の側に立ってやろうということは、かなりみんな一致していたと思う。

○質問者 その意思決定に参加したメンバーは。

○海江田元大臣 意思決定の全人間が。だから、ここで余り大混乱が起きるとかというこ

【取扱い厳重注意】

とはあれしない。

ただ、30キロになると、いわき市が入ってしまうのですね。そこは、いわき市のことはちょっと考えたけれどもね。

○質問者 影響が大きいと。

○海江田元大臣 大きいというか人数が多いから、これは大変だなと思ったけれども、20キロぐらいまでは別に全然問題なかった。

○質問者 例えば、この20キロ圏内に拡大するという話が出たときに、例えばそれが、20キロ圏内に拡大したときには、いろいろ政府側としても、自治体と連絡をとったり、あるいはいろいろな地域住民に対して自治体を通じて周知をしたり、また、バスの手配をしたり、避難場所を確保したり、いろいろなことをやらなくてはならないものが増えてくると思うのですが、そういうことが可能なかどうかとか、すぐにそういう受け入れ態勢も含めて、移動手段も含めてそういうことが可能なかどうかとか、その辺の議論というものは、これは決まった後にされることなのですか。それとも、その決まる前に、それが可能かどうかを含めて議論して、それは許容し得るものだなということでも20キロを。

○海江田元大臣 だから、避難・退避のときは、必ず伊藤危機管理監も同席したはずですよ。それで、事務方も入っていた。それから、官房長官も勿論入ってやりましたから、そこは、具体的にどういふ話があったか、「いや、難しいけれども、やります」というような話もあったらと思うけれども、だけど、一応そういうことも念頭に置きながらやったということですね。

○質問者 では、またちょっとあちこちになるのですけれども、同時期に並行でそういう話があって、海水注入の方は、結局、班目先生の方で、その可能性が全くないまでは言えないというような話になってから、その後どうなったのですか。それだと菅総理も納得されないと思うのですけれども、その後どうなったのですか。話に聞いているところだと、一旦ブレイクをして、また再開してというような話になったように聞いているのですけれども、まず、そういうことはございましたか。一旦休みみたいなことは。

○海江田元大臣 それは、一旦ブレイクしたのかもたしれないね。だけれども、何かそれで、最後は、あれはたしか納得してもらったのでしょ。

○質問者 原安委の先生で、前半戦、班目先生が膠着状態になったのですけれども、その後、ブレイク後に委員長代理の久木田先生がかわりに来られて、それで意見をおっしゃられたというような話もちょうど伺っているのですけれども、そういうことはあった記憶は。

○海江田元大臣 いや、そう言うなら、そういうことは別に間違ったことは言わないだろうから、そうだろうと思うけれども、僕は余りそのところは記憶が。

○質問者 記憶はないですか。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 では、その後の、再臨界の話があった後、結局、大ざっぱに言って、菅総理も海水注入には納得されたということになるわけですね。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 納得したと。それは確認した。

○質問者 その間、その菅総理が納得されるまでの間、措置命令は出しているものの、まだ注水は始まっていないものだと海江田先生の方は考えておられたと。

○海江田元大臣 そう認識していた。そのかわり、措置命令を取り消すつもりは別になかった。それは、必要もないと思っていたからね。

○質問者 それから、その後、3月13日ころに。

○質問者 ちょっとその前に12日の話で1点だけ。ちょっと時間が戻ってしまうのですが、菅総理が1Fを視察に行かれたときに、後になって、最高指揮官が中央を離れて現場に行くことの是非についての議論があったりもしたのですが、当時、菅総理が現地に行かれるということを聞かれて、委員長御自身がどういったことを思われたのか。事前に聞かれて、御一緒しますとか、そういったやりとり、御所感というのはございましたか。

○海江田元大臣 僕は、菅総理の性格はよく知っているからね。昔からの古いつき合いだから。だから別に、行くと言えば行くのだらうなと思って。そここのところのやりとりがあったかどうかは覚えていないけれども、とにかく僕は官邸に残って、さあ、今、官邸で責任を果たさなければいけないのは自分だなとは思ったよ、これは。この原子力の問題で責任を果たさなければいけないのは、自分一人しか、今、官邸にはいなくなったなとは思いました。

○質問者 そうしますと、委員長のところにお話が来たときには、もう既に菅総理は行くことが決まっていた。

○海江田元大臣 明るくなったら行くという話だった。それで、来いとか来るなとかという話はなかったな。

○質問者 わかりました。

もう一点だけ、12日に、当初、官邸の地下の中2階で活動されていたのですが、その後、活動の場所が5階に移る。それで、聞いた話で、委員長御自身の方から、行ったり来たりしていてもあれあので、もう5階に移ろうという話が出て上に行かれたというようにお話も伺っているのですが、何かきっかけがあつて。

○海江田元大臣 あれは、最初のきっかけは、会議室をとにかく探してくれと言ったんだよ。5階のところを見たらおわかりになると思うけれども、いすだって、本当に幾つ、4つとか5つぐらいしかないのですよ。そこに大分人がたくさん来るようになって、とにかく官邸の中に会議室を探してくれという話で、そうしたら、秘書官のだけれど、あそこの隣がありますということで。最初は会議のための部屋だと思っていたのだね。だから、それで会議のしつらえをやって、ホワイトボードを持ってこさせたりして。

そうしたら、菅総理にもいろいろ報告しなければいけないから、そうすると、その意味では、いろいろ話をするのにあそこが便利だからね。ただ、使い勝手は余りよくないというか、何かすごく高級な部屋なんだね、あの部屋がね。まあ、ほかになければしょうがない

【取扱い厳重注意】

いので。だけど、最初は会議室ということで、いない間にちょっと整理して会議をやろうということだったのですね。

○質問者 今の、菅総理が現地に行かれるわけですが、よほどの差し迫ったと言いますか、いろいろな判断があったのでしょうか、総理が現地に行くのだというのは、何が一番だったのでしょうかね、当時の状況としては。

○海江田元大臣 やはり現地の情報が入ってこなかったのだと思いますね。

○質問者 先ほど言われましたように、東電の意思決定過程が官邸の方に全然見えなくなって、後に例の1Fから退避する方が出て、あれも同じような問題だと思うのですが、その後、現地の東電の対策本部に大臣が行かれて、そういうその前後の話をずっと勘案してみられて、やはり東電の意思決定というのはこんなところだったのかと、何か後で思われるところはありますか。

○海江田元大臣 だから、1つは、ハード的に言うと、東電の本店のセンターというのは非常にしっかりしているのですね。ハード的に。だけれども、ハードというのではなくて、やはり人間の問題で、特に最初のところで清水社長がいなかったとか、あるいは勝俣会長がいなかったというのは、僕は、いろいろな意味で結構大きいのかなと思っています。

ですから、その意味では、そもそも統合対策本部というのは別に法的な根拠のない組織ですから、そういうものをつくったことがおかしいとか、いろいろ言う人はいますけれども、私はそうは思わなくて、とにかく東電の本店が何を話しているか、それから、テレビ会議の様子を通じて現場がどうしているかということは、あそこに行くことによって非常によくわかりましたのですね。それまで、本当に現地の情報は勿論入ってこない、それから東電の本店が何を考えているのかわからないという、非常に、一種のフラストレーションですね、これがあそこへ行くことによって解消されたことは確かです。

○質問者 その本部の設置は菅総理の発想なのですか。

○海江田元大臣 それはそうです。

○質問者 総理の1Fに行かれる前に、委員長も吉田所長とお電話で話をされたりしていたのですが、そのことは総理は御存じだったのでしょうか。

○海江田元大臣 吉田さんと話したことを。

○質問者 はい。

○海江田元大臣 どうだろうか、それは。報告したとすれば、吉田所長とは電話で話をしましたと。海水のことは、そのときは海水ではなくてベントでした。ベントをやっていましたということを報告したはずですよ。

○質問者 その時点では、菅総理が自分から吉田所長に電話をして状況を確認してみようとか、そういった、状況確認とか、そういうお考えは菅総理にはなかったようですか。

○海江田元大臣 ただ、そこはわかりません。そのとき、総理が知っていたかどうかはわかりませんが、総理も知っていたやに私は聞いています。たしか、それは新聞記事か何かだろうと思いますけれども、吉田さんには電話したのではないですか。

【取扱い厳重注意】

○質問者 それから、20キロの避難の関係ですけれども、10キロごとにはいろいろ想定もあるわけですが、20キロというのは新しい範囲になりますね。12日の夕方ぐらいにその議論をしているときに、お手元にどのくらい、例えば20キロまで拡大するとどここの市町村が入ってくるかとか、その辺の図面とかは。

○海江田元大臣 あります。

○質問者 それは確認されたと。

○海江田元大臣 はい。あと人口があります。どこの町で何名、何名という、それはありました。

○質問者 済みません、ちょっと質問が前後してしまって恐縮なのですが、その中2階から5階に移られたという話で、官邸の中2階で活動されていて、先ほど携帯のお話もありましたけれども、5階に移った方がいいというふうな何か具体的な問題であったり、御不便が生じていたのでしょうか。

○海江田元大臣 だから、結果的に5階に移ることになりましたけれども、前と違ってきたことというのは、携帯電話が通じるようになったことと、それから、総理とすぐに話ができる、総理あるいは官房長官と話ができるということ、その2つはメリット。

○質問者 そういった御不便を当時も感じられた。

○海江田元大臣 だから、それがなくなったということで、それはよかったかなと。だって、あの中2階は何か変なものな。変と言うのはおかしいけれども。

○質問者 それで、13日以降、5階の方に中心におられて、そのころの東電の、特に第一原発のいろいろなプラントの状況についてとか、あるいは、そのプラント外の状況でもいいのですが、そういった情報というのは、これは東電なり保安院の方から受けていたのか、それとも、その緊参チームとか、地下の方にいるところから情報を受けていたのか、あるいは双方からか、どういう形でその情報を把握されていたのですか。

○海江田元大臣 基本的には、東電の状況はやはり東電から来ている2人、それからあと、保安院も来ていましたから、保安院の人たちから聞いていました。ただ、時々下からいろいろな情報が上がってくることはありましたね。

それから、特に避難なんかでは、そういう意味では下からの情報が大事だったと思いますよ。

○質問者 その実施状況についての報告なども受けておられたということですか。

○海江田元大臣 はい。ただ、それは、官房長官の部屋が多かったかなと思っておりますけれどもね。

○質問者 それから、これは3月13日ごろになると思うのですが、保安検査官に対して、要するに、これはきちんと現場に行って注水の状況を監視するよという命令が

【取扱い厳重注意】

海江田大臣から出されたというような記録も残っているのですけれども、その御記憶はございますか。

○海江田元大臣 ですから、それは、どういうふうになっているのかということが、きちんと保安院もそれをチェックしなければいけませんから、東電のことは保安院もチェックしているのかという話で、チェックしていないのだったら保安院がチェックしろという話です。やるのは東京電力ですけれどもね。

○質問者 ですから、あくまでもきちんと注水がなされているかどうかを把握して、それを保安院としてきちんと把握するよという指示を出されたということですか。

○海江田元大臣 だったと思いますね。

○質問者 それは、そういう指示を出されたということは、その前の段階では、大臣としてちょっと不十分かなと思われる節があったのですか。

○海江田元大臣 保安院としても、実際に作業をやるのは東京電力ですけれども、やはり保安院もそれを確認する必要があるのではないかと思ったからで、そのときになって、恐らく、保安院がもしやっていないのだったら、それは保安院もやるよというのを言ったのだと思います。

○質問者 これは、どなたに対しておっしゃったかという御記憶はございますか。

○海江田元大臣 それはちょっと記憶にないね。

○質問者 記憶にないですか。保安院のしかるべき責任ある方におっしゃられたということですかね。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 それで、ちょっと話が、時間の関係もあるので飛ぶのですけれども、またこれも。

○質問者 ちょっと済みません、13日の件で1点だけ。13日ごろから、保安院の安井部長が官邸にいらっしゃって、保安院として事故対応に当たられることになったのですけれども、それ以前に、大臣の方から、保安院としてきちっと説明できる人を官邸によこしてほしいといった発言があったということも一部聞いておるのですけれども、保安院の方のそれまでの説明に対する大臣の御認識であったり、あと、そういった指示そのものを出された御記憶というのはございますか。

○海江田元大臣 それはずっと、海水注入のときもそうだけれども、どちらかというと、保安院の人で、やはり総理の前に呼ばれると、なかなかうまく話ができないのかもしれないけれども、冷静に聞いていて、少し頼りないなというのもあったことは事実です。だから、やはりきちんと話ができる人が、僕はだれかわからないけれども、とにかくこちらへよこしてくれよということを言ったことは確かです。そう思っていましたから。

○質問者 それから、これは3月14日から15日にかけての夜のことについてお尋ねします。この中で1つ、東電の撤退の話と、あとは、オフサイトセンターの福島県庁側への移転の話というものがある程度並行して出てきているころの話なのですけれども、まず、その前

【取扱い厳重注意】

段の東電の撤退のお話というのは、これは、いつ、だれから一番最初に聞いたのかというのは、今の記憶だとどうですか。

○海江田元大臣 私の記憶では、やはり清水社長からの電話ですね。

○質問者 電話ですか。では、その電話を受けたのは、時間的にはいつごろだったと。

○海江田元大臣 12時近くだというようなあれもあるし、もう少し早い時間ではないかということで、では、2回あったのではないかという説もあるのだけれども、そのところは、本当のことと言って、記憶がはっきりしないのだね。

○質問者 では、回数は1回あるいは2回。

○海江田元大臣 2回の可能性もある。それは、清水さんに聞いてもらった方がよくわかると思うけれどもね。

○質問者 それは、記憶としては12時近くぐらいにあったような記憶があつて、そちらの記憶の方がまず強くて、それに加えて、もしかしたらもう少し早い段階でもあったかもしれないという理解でよろしいですかね。

○海江田元大臣 そうそう。

○質問者 では、その記憶に強い方についてお伺いしますがけれども、12時近くというところのことですね。この12時近くのころに電話を受けたときというのは、これは携帯電話で受けられたのですか。

○海江田元大臣 これは、秘書官経由だよな。そうだろう。

○秘書官 はい。

○海江田元大臣 秘書官経由だ、それは。

○質問者 そのときは、どちらにおられたのですか。

○海江田元大臣 僕は官邸の5階にいた。

○質問者 官邸の5階で何をされていたときですか。

○海江田元大臣 いや、それは覚えていないな。また、原子力事故対応をしていた。

○質問者 例えば、だれかと会議中とか、そんなのではないですか。

○海江田元大臣 覚えていないよ、それは、悪いけれども。

○質問者 そうしたら、そのときに携帯電話で清水社長から、どのようなことを言われたのかと。

○海江田元大臣 僕が覚えているのは、「撤退」という言葉ではない、あれは「退避」という言葉。第一発電所から第二発電所に退避。作業員というのかな、第一発電所から第二発電所へ退避させたい。線量が高くなっているからというようなことだな。覚えている言葉はそういうこと。

○質問者 それを聞いたときに、それは、退避をしたいと考えているのだけれども、よろしいかという伺いを立てるような感じだったのか、あるいは、もうそう決めたからという報告のような感じだったのか、どういう感じで向こうは電話をしてきたと受けとめられましたか。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 電話をしてきたのですから、お伺いでしょうな。

○質問者 お伺いと。では、そういうふうに認識されて、どう、要するに、「ちょっと待ってくれ」ということなのか、「いやいや、だめだめ、もう全然話にならない。そんなことやってはだめだ」となったのか、どういう反応をされましたか。

○海江田元大臣 そのときそばにいた人に、これは第一発電所から第二に行ったらどうなるのかということを知ったのですね。それは、第一発電所は5号、6号を含めて全部もう爆発ですよ。そういう話を聞いたから、それはもう無理だということでは言いましたね。

○質問者 それで、そういうふうに清水社長の方にも伝えたということだったのですかね。では、その電話、それはもう、そのやりとりだけで、ほかの話題はなくなるといいますか。

○海江田元大臣 なかったね。

○質問者 では、その後、電話を切られて、どなたかに、東電がこういうことをどうも考えているみたいだったので、自分としてはそれは拒んだというようなこととお話しされましたか。

○海江田元大臣 官房長官と、それから、総理には僕はそれは話したね、当然のことながら。たしか官房長官にも話したと思うけどね。

○質問者 それは、時間的には、12時近くということだと、その後、間もなく。

○海江田元大臣 間もなくではなくて、もう少し時間がたっていたかもしれない。

○質問者 時間がたってからですか。

だめだよということでは拒んだときの先方の感触としては、「ああ、そうですか」ということでもうあきらめた感じだったのか、何か向こうは食い下がってくるような感じだったのかというのはどうですかね。要するに、一応そうは言っても拒んだので、この話はなしになったと思っておられたのか、あるいは、なおも懸案事項としてずっとそれはつながるといような御認識だったのか。

○海江田元大臣 とにかく僕は、それは厳しい状況はよくわかっていますから、何とか、だめだよとかという言い方よりも、「何とか残ってください」という言い方だったと思うんです、言い方として。そうしたら、「そうですか」みたいなやりとりでね。「絶対だめだ」とかそういう言い方ではないから。こちらもやはり、それは何人かが急性被ばくの可能性もあるから、それはこちらも非常に深刻だったよ。それを言えば、もし何かのことがあれば、その人たちが命を失うことだからね。

○質問者 そうすると、そういった、これは経済産業大臣に対して事業者の方からそういうお伺いというか、そんなことを考えているのだけれどもと電話があって、そのことと、それから、その後、いろいろなところで話が出ている、ある程度、主要な当時の意思決定なんかにかかわるような形の官房長官だったり、あるいは副長官だったり、班目委員長だったり、そういった人たちが入って、どうなるのだ、ああなるのだというような議論は、その後されているのですか。

【取扱い厳重注意】

○海江田元大臣 そのときは、班目さんとか、それから、よく総理の前で議論するとき、そういう事務方が入るときと入らないときと2つ種類があるのだね。それで、恐らく政務だけで話したときもあったと思うけどな。かなり、ちょっと政務以外は席を外してくれと言って、政務だけで話したときもあったと思うな。ただ、最終的なときは、政務以外に入ったのかどうなのかな。最後の、とにかく清水さんと呼んで、そしてそこで話をしたのだね。最終的な話はしたのだ。そうしたら清水さんは別に、「ああ、そうですか」と言って引き下がったのだね。

○質問者 では、まず、例えば御記憶がきちんきちんとなっていないければ、何となくのアルバイトなものでも構わないのですが、政務の方だけで集まって話をした、あるいは、そこに官僚が入っていた場合があるのかもしれませんが、その場で、要するに撤退してしまえば、これは5、6号も含めて爆発してしまうというような話になっている。それは、普通に考えれば多分そうなると思うのですけれども、そうであれば結論が見えているようにも思うのですが、そこでどういうことを話し合われていたのですかね。例えば、そうは言っても、どうしても撤退せざるを得ないような場面というのは、どういうことになったら引かなければいけないのかとか、そういうことを、将来を想定しての話なのか、あるいは、いや、もう絶対にこれはないねというようなことの確認をし合うだけのものなのか、どんなお話し合いをされていたのかと。

○海江田元大臣 今の段階では少なくともないねという話だね、みんなの話は。

○質問者 撤退ということは。

○海江田元大臣 共通の確認は。本当に、もっとボンボン爆発してくれば、4号とか2号の爆発、あれはその後の話だからね。だから、その意味では、1号がボーンと行って、それから、3号はどちらだろうか。

○質問者 3号も前ですね。

○海江田元大臣 前だね。1、3だな。1号と3号の話だね。1、3号の話で、2、4号はその前だよな。だから、まだできることはあるのではないかと思ったね、僕は。

○質問者 みんなが、その政務の方などがお集まりになられて、そういったお話をされているときに、例えば、吉田所長なんかの現場の方の意思を確認してみようということで、電話をされたかどうかという記憶はありますか。

○海江田元大臣 それは、していないね。

○質問者 していないですか。

○海江田元大臣 していないね。

○質問者 それから、そこから清水社長が官邸に来て菅総理とお会いになられるに至る、どういう経緯でそういう話になったのですか。

○海江田元大臣 その意味で言うと、清水社長を呼ぼうと言っているのは総理なわけだから、全く東電は何を考えているのだという話だろうと思って、先ほどのベント、海水注入と、僕の中では海水注入に不信感が募っていたわけだけれども、恐らく菅総理も同じかな

【取扱い厳重注意】

と思うから、その意味で言うと、東電に対する不信感が一番頂点に達したときではないかと思うんですね。

僕の場合は、不信感というのはそれほどではなかったけれども、ただ、やはりここでは引けないなと思ったけれども、全体の雰囲気からすれば、不信感が一番頂点に達して、とにかく呼んできて、はっきり言い渡さなければだめだ、何を考えているのだということだったと思いますね。

○質問者 それは、菅総理がそのようにおっしゃられたのですか。

○海江田元大臣 そうですね。

○質問者 その話、要するに清水社長を呼ぼうというようなお話になるまでの、恐らく菅総理の方にも報告をされて、みんなでその話をされてという場面があると思うのですが、そういう場面で、例えば、その後で上がる統合本部の話なんかは出ているのですか。

○海江田元大臣 統合本部の話は出ていないけれども、とにかく東電との間、特に東電の本店との間の意思疎通というのは全然できていない、これは何とかしなければいけないという思いはあったと思う。私にはあったし、総理にもあったと思う。

○質問者 それは、具体的な言葉はともかく、総理がそのような東電の本店との間のコミュニケーションが十分図れていないとお思いになっているだろうと思われるような言葉というのは、端々に感じられましたか。総理の言葉から。

○海江田元大臣 ちょっとそこは覚えていないけれども、ニュアンスとすれば、「全く東電は何考えてるんだ」というニュアンスだろうな。だから、本人を直接呼んで聞こうという話だから。

○質問者 3.11の発災時、経済産業大臣として物すごく厳しい御判断をされた場面もたくさんあると思うのですが、まさにこの退避の問題もそうでしょうけれども、時系列的に今、見ていただいて、厳しい御判断をされたというのは、どんな場面を、先ほどのベントにしる、海水注入とかあろうかと思うのですが、どんな感じでしたか。

○海江田元大臣 本当に正直言いますと、この日ですよ、ベントをやっているこの日です。それまでは、別に、やらなければいけないプロセスに直接、すぐ命とか何かがかかってこないと思いましたが、この日はやはり、それは何百人という人がいたわけですから、これは何百人の全員というわけではないと思いますが、少なくともやはり何十人が、残せば亡くなるかなと思えましたよ。

○質問者 そうですね、特攻隊みたいな話になりますものね。

○海江田元大臣 そうですよ。それは、だから、これが一番つらかった。

○質問者 そのように物すごく厳しい思いが。

○海江田元大臣 これは、やはりかなりね。もう深刻な事態だというのはわかっていましたし、それから、ベントのときでも、本当のことを言えば、こちらもかなり無理言っているなというのはわかっているんですよ。だって、真っ暗で、線量は高いし、しかも、そういうことは慣れていないというかね。まさかマニュアルがないとは思いませんけれども、

【取扱い厳重注意】

やはり、まず、なれていない。本当に暗やみの中、手探りでやって。これもなかなか言うのはつらかったですけれども、まだ、それでも、そこはやってもらうしかないし、時間的にもそれほどたっていませんでしたから、それは、やってもらうしかないから、このときは、ちょっといろいろ考えましたね。

○質問者 今のお話も、吉田所長などは、そんな現場から離れるつもりはなかったのだと客観的には言っておられるのですけれども、そういう話は全然官邸の方には伝わっていませんでしたね。

○海江田元大臣 伝わっていないですね。

○質問者 そうすると、官邸の中での協議状況といいますか、撤退を決めるかどうかについては、すごく重たい空気でしたかね。

○海江田元大臣 そうですね。

○質問者 被ばくの問題もありますし、そこはどうするのかというのは、そうしたところですかね。

○海江田元大臣 ええ。

後で、これはどういうあれになるかわかりませんが、その後、60人ぐらい残して退避したときがありましたでしょう。あのとき何かいろいろな混乱があったらしいですね。あのとき間違っただけで全員出ようとしたとかという話もまたあるのですね。それはちょっと、現場の話でないとわかりませんが、バスが来て、みんなそこで乗り込もうとしたとか、それはいろいろあるらしいですね。ちょっとわかりませんが。

○質問者 切りのいいところで。

○海江田元大臣 まだいいですよ。もう少しいいですよ。やはり時間がかかりますな。

○質問者 ちょっと撤退の関係で少し。先ほど、清水社長から電話があったときに、そばにいらっしやった方にどうなるのだと聞いたら、5、6号機もだめになるということだったと。このそばにいた方というのは、具体的にはどなたであったかという御記憶は。

○海江田元大臣 それは安井さんだと思うけれどもね。

○質問者 あともう一点、退避ということを知られて、官邸内でそういったお話をされているときに、全員いなくなるというような認識で皆さんいらっしやったのか、それとも何人か残して。

○海江田元大臣 僕は全員だと思った。

○質問者 そうすると、今の退避の関係についてですが、その名称はどうあれ、東電の方に直接行って、国と事業者の方で一体となって事故の収束に当たろうという話を初めて御認識されるのは、清水社長が来た後の話になるのですか。

○海江田元大臣 はい。それで、総理が「東電に行こう」と言ったから、「よし、行こう」と、私もその必要を感じていたから、それはもうもろ手を上げて大賛成で、とにかく行って、どうやっているのかこの目で見てこようと思っていましたね。

○質問者 そうすると、清水社長を呼ばれるきっかけというか、なぜ呼ぶかということに

【取扱い厳重注意】

については、その全面撤退のようなことについては絶対に、この時点では。

○海江田元大臣 あり得ないと。

○質問者 あり得ないということを使うためにということであって、統合本部みたいなものをつくるということも含めて話し合おうとか、そういうことでは御認識されていなかったのですかね、最初の時点では。清水社長を呼ぶ時点では。

○海江田元大臣 それは総理の考えだから、私にはちょっとわからないけれども、私は、そこまでは考えていなかった。統合対策本部をつくらうということは、余り考えていなかった。

○質問者 では、その場で、清水社長が来られてからの話の中で、それは当然そういう方がいいなということで、すぐに賛同されているということですか。

○海江田元大臣 だから、そこで、清水社長の話で、統合対策本部をつくるというような話まではたしか出なかったはずですよ。

○質問者 そこにいるときにはですか。

○海江田元大臣 とにかく撤退はあり得ないのだ。そのころから言葉が「撤退」という言葉に置き換わったのだけれどもね。

○質問者 それまでは「退避」。

○海江田元大臣 清水社長は「退避」という言葉だったけれどもね。

○質問者 どこかで東電に対して、東電の本店に国の方々が行かれるわけですから、一応の事業者の了解みたいなものをとると思われるのですけれども、それは、清水社長がその場に来られたときに了解をとったのかどうかというのは。

○海江田元大臣 だから、とにかく、これから行くということは言ったはずですよ。それで、細野君が先遣隊で行ったのです。その先遣隊で行って、一応、場所のしつらえや何かをやって、そこに僕が総理と一緒にいったという形です。

○質問者 撤退はあり得ないということで、清水社長を呼ばれて、それで言われました。清水社長はどういうふうに。

○海江田元大臣 そのときですけれども、それは、一部は残そうと思っていましたというようなことを言った、そういうニュアンスで、ちょっと正確な言葉は覚えていませんけれどもね。だから、それは総理、それから私どももそうですけれども、私どもの考え方に、それはそれで結構ですと、それに対して抗うことはなかったです。

○質問者 では、そのことと東電に行こうという話は、これは一応了解されたわけですね。

○海江田元大臣 はい。

○質問者 その上で、なおかつ東電に行き様子を見ようというのは、どういう御判断だったのですか。

○海江田元大臣 先ほどちょっとお話ししましたけれども、恐らく不信感が一番高まっているから、一体どうなっているのだろうか。やはり何を考えているのだろうか。東電に、やはり一つ、このオペレーションというか、この原発事故を収束させることがどんな

【取扱い厳重注意】

に大きな大切なことなのか、日本の国にとってもどんなに大切なことかを直接話をしてこようということだろうと思いますね。

○質問者 わかりました。

○海江田元大臣 ただ、そのあれが何で、私は、清水さんがもう少し抗うのかなと思っていたのですよ。

○質問者 了解されたわけですね。

○海江田元大臣 だから、それはちょっと、どうしてそういうことになったのかなと思って。それは、途中で思い直しをしたのか、あるいは剣幕に押されたのか、そこはわかりませんが、ここは、はっきり言って、ちょっと違和感はありましたね。

○質問者 総理から東電に行くというお話があったときには、継続的な対策本部をそこにつくるというイメージだったのか、それとも、とりあえず行ってみて状況を確認してみようという感じだったのか、その辺のイメージはいかがですか。

○海江田元大臣 とりあえず行ってみようということですが、ただ、そこで、行ってみましたら、先ほどお話ししたような、ハードもしっかりしていますから、私はここなら絶対いいと思いました。こちらでやっているよりは、意思疎通もできるしということ。だから、私も、あそこに行ってよかったと思うし。原子力の経済産業大臣があそこに行くことについてのいろいろな議論は、経済産業省の中であったやに聞いていますけれども、私は、それは全然違和感なくて、とにかく事故をおさめるためには、現地かあそこが一番いい場所だなと思いました。

○質問者 では、あと簡単に、他方で、オフサイトセンターなのですけども、オフサイトセンターを、恐らく周囲の線量なんかも相当上昇していてなかなかうまく機能していないというようなところで、移転をするという、その話自体はどのところに。

○海江田元大臣 これは、やはり14日の夕刻ぐらいからありましたね。それで、これもどこの場所がいいかということで先遣隊を出して探してくるということを言っていましたから、これは、池田副大臣からそういう話がありましたから。

○質問者 これは電話ですか。

○海江田元大臣 はい、勿論電話です。

○質問者 .それで、実際にそちらの話、当時、官邸に経済産業省の松永次官が14日の夜にお越しになられていると思うのですけれども、これは、なぜお越しになられたのかというのは。

○海江田元大臣 これは、何か新聞の連載なんかでは、東電の撤退について、撤退させてくれということを言いに来たみたいに書いてあるのですけれども、それは私の発言ではなくて書いてあるのですが、あれは全然事実とは違いますね。彼は、計画停電かエネルギー何か、その関係が一つと、それから、もう一つ考えていたのは、やはりオフサイトセンターのところの撤退に絡んで、保安院の人たちもいるわけですから、保安院の人たちをどうしようかという話だったと思っています。

【取扱い厳重注意】

○質問者 保安検査官事務所があるので、その方々をとということですね。

○海江田元大臣 そうです。

○質問者 では、これについては、どうするという判断をそこでなされたわけですか。

○海江田元大臣 だから、オフサイトセンターが福島県庁の方に移れば、そっちへ当然移る、つまり詰めるということだろうと思います。

それからあと、勿論そういう意味では、あれが残っている限り、現場にいる人はそこへ残ってもらわなければいけませんよ、これは当然。保安院だけ逃げるなんてもつてのほかだから。ただ、保安院の駐在官の事務所をそっちに移すということは、それはそれでいい。そこでローテーションで現場へ行っていただくと。

○質問者 わかりました。

○質問者 経済産業大臣として、まさに保安院の問題が今いろいろ議論されていますけれども、よく言われているように、推進官庁の中に保安院があるのはおかしいではないかと言われていると思いますが、現に大臣として今回経験されて、あるいは過去のこともいろいろ考えて、どんな感じをお持ちですか。

○海江田元大臣 それは、やはり確かに推進官庁の中に規制官庁があるのはおかしいですから、これはもう分けるべきですし、それを分けてこなかったということは、これまでの失政ですね。

○質問者 抽象的にはわかりますけれども、具体的には、いろいろな問題が。

○海江田元大臣 これは、いろいろな意味での人的な交流話がありまして、資源エネルギー庁にて、かなりしかるべき仕事をやっていた人が、まさに保安院のしかるべき役所という、資源エネルギー庁と、結果的に経済産業省の中にありますから、その問題はやはりありますね。そこは、まさに推進と規制が一緒になるということで、どうしてもこれまでの人事を見てみれば、皆さん、やはりエネルギー庁と保安院の間の交流の人事がかなり頻繁に行われていますのでね。

それで、あと1つだけ、これは、保安院の連中もなかなか厳しいところがあったと思うのですが、私は全国の検査官事務所が、15か所ぐらいあるのかな。あれは20だったか、15だったか。

○秘書官 済みません、記憶がありません。20ぐらいだと思います。

○海江田元大臣 それで、全部、福島に行ってこいと言って、ローテーションをつくらせて全部行かせたのですよ、250人ぐらいを。それで、行ってきて、その所長を集めて3回ぐらいにわたって、それぞれの行ってどういう感想を持ったか、感想文は書かせなかったけれども、いろいろ言わせたんです。そうしたら、結構いい意見が出てきてね。やはり自分たちがしっかり仕事をやらないと一体どういうことになるのか、一回そういう事故が起きたらどういう悲惨な目に遭うのか、肌で感じてこいと言って、全部、2回ぐらいローテーションを組んで、かなり早い段階で行った。

それは、1つは、保安院の人間もずっと詰めていますから、それだけではあれだからと

【取扱い厳重注意】

いうこともあったのですが、実際に肌で経験させて、それは、かなりいろいろないい意見を言ってくれた。その意味では、そういうことで、今度あちらへ送り込まないとだめですから、そういうことでは、保安院だめだ、だめだと言うのもいいのですけれども、それだけでは、スポイルされていったのでは何にも役に立ちませんから、そこはやったつもりでね。

ただ、これまでの組織的な経済産業省の中にあるということと言うと、どうしてもやはり、昨日も原子力の推進派というのが怖いということ、なかなかやはりね。

○質問者 わかりました。ありがとうございました。

○質問者 どうもありがとうございました。また来週よろしくお願いします。

○海江田元大臣 また来週よろしくどうぞ。

以 上